

---

# セツナイ恋の詩

羅依

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セツナイ恋の詩

### 【Zコード】

Z8392

### 【作者名】

羅依

### 【あらすじ】

高校に入学した秀一が出会ったのは少し内気な由依。秀一と由依は学級委員にされ、秀一は由依と話していくうちに惹かれてゆく・・・

## 出会い

僕は初めてあなたに恋をした。

高校1年 春

あなたと出逢い

そして、僕はあなたに恋心を抱き

高校1年 夏

あなたと僕は付き合い始めた . . .

あなたを愛し僕は人生がとても楽しかった。

苦しいことや悲しいことがあってもあなたが居たから頑張れた。

もしあなたが

どんなに遠くに行つても

僕はあなたを愛し続けるよ。

それが僕に出来る精一杯のコトだから・・・

舞園高校 入学式

桜の木が花を咲かせ

満開の桜の下

舞園高校へ新入生が歩いていく

その中に、

ひときわ目立つ髪の毛・・・

オレンジ色をした男子がいた。

その名は、

砂我 秀一 -さが しゅうじ-

見た目がいかにもキャラそうだった。

「ふあー、寝みい」

大きなあぐびをした。

「入学式とか、めんざい」

秀一はため息をついた。

秀一は校門を通り抜け、クラス表見に行つた。

クラス表の前には大勢の人が表を見ながら騒いでいた。

「えっと、俺は . . .」

… 1組だった。

「1組に知ってる人いつかなあ」

秀一は教室へ向かつた。

「よお。秀一」

「よお . . .」

「元気ねえなあ。何かあつたか?」

「何もなかつた。ただ、寝みいだけ」

秀一はそう言つと、名前順で指定された席についた。

「これから、入学式を始めますので新入生の皆さんは体育館の方に移動してください」

秀一は放送を聞き体育館へ向かった。

入学式は、ほとんど校長先生の話ばかりだった。

約1時間、入学式をやっていた。

今日は入学式だから授業はないが、学級委員などを決めなくてはならなかった。

「だりい」

秀一は俺には関係無いなと思い顔を伏せた。

1組の担任は近藤 雅也という先生だ。  
見た目は結構若い。

〔女子で学級委員やりたい人居るか？推薦でも良いぞ〕

一人の女子が手をあげた。

……沈黙

「えっと、前田やつてくれるのか？」「……あのお、推薦したいひとがあ居るんですけども」

「誰を推薦するんだ？」

「私はあ、佐藤さんが良いと思つんですけども」

「ああ、佐藤か。佐藤、学級委員やつてくれるか？」

佐藤とよばれた女子はほくくんと頷いた。

「じゃあ女子は佐藤つと。男子でもつてくれるものか？」

……再び沈黙

「ハイ、ハイイ砂我君が良いと思います！」

お調子者のような男子は秀一の親友の相沢 真 あいざわ まことだった。

「俺の名前ーー？」

顔を伏せていた秀一はすぐさま真の方を向いた。

真は秀一の方を見て笑いながら手をピースにした。

「あいつう」

結局、他に誰も立候補をしなかったので男子の学級委員は秀一に決まってしまった。

休み時間になると秀一は真の席に行つた。

「し、秀一」

秀一がにらんだので真は焦つた。

「真一！なんで俺を推薦したのかなあ」

「だつてさ、秀一頭良いし入試も一番だつたし見た目と違つてリー  
ダーツぽいから・・・」

真は、秀一の周りに殺意があることに気付き逃げ出した。

「おい、待て！」

真が全速力で逃げたので、秀一も全速力で追いかけた。

結局、数分後に真は捕まつてしまつた。

「ゴメンつて、本当にゴメン」

「謝つても決まつたもんは直せないんだあ！」

「だ、大丈夫だつて。秀一ならしつかりまとめられるつて  
「そんなコトが言いたいんじゃなくて、そもそも学級委員がめんど  
いんだよー。」

「ゴメンなさいー。」

そんなことをしていつかに、帰りのホームルームが始まつた。

「入学式も終わり、お前達は立派な舞園生だー明日からは通常授業

だがダラダラせず、高校生だといふ気持ちを持ち登校しなさい。それと、学級委員は放課後残るようにな！じゃあ解散

みんなはバタバタと友達と一緒に帰つていった。

「頑張れ秀一」

後ろから真が話してきた。

「そもそも、お前のせいだらうが！」

「怒らないでよお」

真は半泣き状態で言った。

「死ねばいいのに・・・」

ボソッと秀一は呟いた。

「ヒドー！俺、地獄耳だから聞こえちやつたもんね

「バーカ」

秀一は怒りながら言った。

「うつ、バカだから反論できない」

「ざまあみろ！」

「あつ、そろそろ帰らないと」

真は泣きながら帰つていった。

「ふう」

秀一は先生がくるまで持つてきついた本を読み始めた。

「い、意外ですね」

話しかけてきたのは女子の学級委員の佐藤 由依だつた。

彼女は小柄で影はうすくはないが、物静かで結構可愛い子だ。

「何が意外なんだ?」

「本を読んでるのが . . .」

「ああ、本か! 確かにみんなに意外つて言われる」

「本好きなんですか?」

由依はおずおずと聞いた。

「好きつて言つか、読んでると一人になれるつて言つか、落ち着くんだよな」

「分かります! その気持ち

由依は目を輝かせて言いながらうんうんと頷いた。

「お前も本好きなのか？」

「はーい」

由依はにっこりと笑顔になつた。  
その顔を見て秀一は一瞬ドキッとした。

「あの、私の名前分かりますか？」

「えっと、名前・・・。『メン分かんないや』

「そつか、私はちゃんと覚えてるのに・・・」

「冗談だつて（笑）」

秀一はイタズラする小さな子の無邪氣な笑顔のよつと笑つた。

「からかわないでください」

由依はやつきの真と回じよづけ半泣きになつていた。

「佐藤由依だる。入試のとき席隣だつたし」

「覚えてたんだ」

「俺、記憶力だけは良いからな」

「記憶力だけじゃないですよー。頭良いし、それに・・・優しいです」

「何か照れるな」

教室のドアが開き先生が出てきた。

「お前ら知り合いだつたのか?」

「いいえ、入試の時に席が隣だつただけです」

秀一は直ぐに先生の質問に答えた。

「まあ、それはいいとして今月にやるクラスの中を深めるための会宿のしおりをつくりて欲しいんだ」

「めんどり」

「学級委員に選ばれたんだからちやんとやれー」

「はーーー

秀一はまやかぬがなによい返事をした。

「じゅあ、頼んだぞ」

先生は秀一の前に資料をドサッと置くと教室から出でていった。

「よし、やるかあ

由依は田を真ん丸にして秀一を見た。

「どうした？」

「さつあまで、めんどこって言ひてたのこ、いきなつやる気になつてるから」

「やうか？」

「意外とがんばつ屋なんですね！」

「がんばり屋とかじやなくて、癖と言つか……」

「癖？」

「うん、癖。俺の家、父親居なくてさ……」

秀一は手を動かしながら話始めた。

「えつー?」

「母子家庭なんだけど、母さんは毎日仕事で大変そうで家事は俺がやつてたんだ。俺、毎日母さんがいない間に家事して勉強したり夜中には学校のことやつてさ寝る時間ないのに迷惑にならないように大丈夫なフリしてたら、一つの間にか学校でも同じことやってたんだ……」

……沈黙

「悪い。こんな話して」

秀一は少し悲しそうな顔をしていた。

「でも……なんでその事を私に教えてくれたの？」

「何か分かってくれる気がして……」

「えつ？」

由依は秀一がそんなことをいつとは思わなかつたのでビックリした。

「ゴメン、ほぼ初対面なのに」

……再び沈黙

「謝らなくて良いよ。だつて私、その気持ち分かるから……」

「へつ？」

「母子家庭つていうわけじゃないけど、親がいつも仕事から帰つてくるのは遅いし朝家出るのは早くて、毎日親と声をかわすことが無くて、親は仕事が大変だから心配かけなによつて砂我くんと同じような感じで人と接してたの」

少しつつ向きながら由依は自分の家のことを話した。

「ゴメン。辛い話をせちやつて」

「大丈夫。もう慣れてるから」

由依は少し無理をした笑顔を秀一に向けた。

「…？」

いきなり秀一は由依のことを抱きしめた。

「えつ！？ ．．．何ッ」

「無理して笑わないで」

抱きしめてきた秀一は別人のように見えた。

「俺が、無理して笑ってる人見ると、なんか助けてあげたいって思つんだ」

由依はビックリしていいのか分からなくなつて頭が真つ白になつた。

パニックになつてゐる由依に気付くと秀一は少し焦つた。

「口、ゴメンな。嫌だつたよな、いきなり抱きしめたりして」

「ちょっとビックリしただけ」

由依は少し顔を赤くして言つた。

「俺、今日謝つてばつかじやん」

秀一は情けない自分にため息をついた。

「じ、じゃ早く頼まれた仕事やらないとね」

2人はさういひなかつたけど眞面目にしおりを作り始めました。

「やつと終わったあ

「疲れた」

出来たしおりを先生に届けに行きました。

「ちゃんと、作ったな」

「「はい」」

「今日はもうやる」と無言から2人とも帰つていいぞ

「分かりました」

2人は先生に礼をしてその場から離れました。

校門の前まで2人でいくと外は真っ暗でした。

「春だつていうのに暗いな。お前、家どしち？」

「なんで？」

「いいから」

「えつと…左に行くけど」

「なら途中まで一緒にだな」

「どういふこと…？」

「女子一人で帰るの危ないだろ」

「送つてこつてくれるつて」「トト？」

「セツだよーすぐに察しろよ恥ずかしいんだから」

「意外だね」

「な、何が？」

「今日は砂我君の意外な一面いっぱい見れたなあ

」

「お前の事も知れたしな」

歩きながら二人は話していた。

「あつーあそこが家だよ」

由依は少し前にあるマンションを指さした。

そして先を見て秀一は畳然とした。

「どうしたの？」

由依は覗きこむように秀一の顔を見た。

「何だろ、偶然？」

「何が？」

秀一はおずおずと由依がさしていいる方をさしながら言った。

「お、俺ん家のマンションなんだけど」

「えつ偶然！？」

結局2人の出会いは偶然だったのか？  
それに、お隣同士だった。

秀一はゆっくり眠れなかった。

由依もゆっくり眠ることができなかった。

次の日

2人は朝から出逢ってしまった。

「お、おはよっ」

「おはよっ」

2人はエレベーターに乗った。

「お前、意外と早いんだな」

「暇だから、つに起きちゃうんだよね」

۱۳۱

「どうか、「お前」って呼ばないでよね！私はちやんと「佐藤由依」って名前があるんだから

「んじゃ、由依つて呼ぶな

「え？ ・・・ もう ・・・ うん」

「おま……じゃなかつた、由依も砂我君とか言わないで秀一って下の名前で呼んでいいから」

「し・・・秀一君？」

「うん？ なに

「あは！」と呼んでみただけ

由依は照れながらも無邪気に笑つた。

そんなことを話してゐるうちに学校までついてしまつた。

ドンシード

「な、なんだ？」

秀一は後ろから誰かに押された気がした。

「よつー。」

人の間から真が出てきた。

「なんだよ、真かあ」

「朝からお熱いですね」

「お前なあ」

イタズラっぽく舌を出して笑っていた。

「学級委員じつじで昨日なんかあつたのかあ

真がそう言つと由依は昨日のコトを思い出して顔が赤くなりました。

「あれえ佐藤さん赤くなつてるよー」

「えつ・・・」

由依は顔を隠した。

「佐藤さん可愛いー」

「えつー?」

「赤くなつたつてコトは昨日なんかあつたんだ」

真はいつもより鋭かつた。

「真一もつ教室いくぞ」

秀一は由依の手をとつて歩き始めた。

「待つてよー秀一」

「待たない」

「ハダヤ。俺なんか気にせわる」アーット言つた?」

真は秀一達を追いかけるように教室に向かつた。

……教室

「おはよー

由依のところに髪の毛が腰ぐらいまである小さな女の子がやつて來た。

「亜美ーおはよー」

「「誰その子?」」

秀一と真はハモつた。

「「」の子は私の親友。滝川亜美」

「よひしへね」

亜美は軽くお辞儀をした。

「えっと……」ひちは

「俺は、砂我秀一。よろしくな

「俺は、相沢真！ヨロシクッ」

「あつーもうすぐH.Rが始まっちゃうよ」

4人は席についた。

ガラッ

先生が教室に入ってきた。

「今日はもうすぐやる合宿の班を決めてもらひ。男女2人ずつ4人  
グループな」

先生がそういうと皆がザワつき立ち上がりして話始めた。

すると秀一の周りに数人の女子が集まつた。

「あのお……」

「何？」

「「一緒に班になつてくれませんか！」」

数人の女子がいつきに言つてきたので秀一はビックリした。

「なんで俺なの？」

「仲良くなりたいなあと思つてえ」

「悪いな。先約入つてから」

秀一は言いながら顔の前で手をあわせた。

「...」

女子達は謝る秀一の姿がもの凄くカッコよく見えたらしい。

一 先約つてえ、誰なんですかあ？」

「けつこー仲良いヤツ」

一  
「

「そういうコトだからゴメンな。またなんかある時誘つてくれ」

秀一は真のところに行つた。

「モテモテだな秀一！」

「うつをこな」

「で、先約つて誰なのさ」

「あの2人とお前」

真は秀一が指した指の方を見た。そこには由依とさつき挨拶をした亜美だった。

「なんである2人なわけ?」

「女子で言葉かわしたのあの2人ぐらいだから。それに・・・

「それに?」

「真、亜美つて子に惚れてるつしょ」

秀一はニヤニヤしながら言った。

「し、秀一・・・気付いてたのかよ」

「気付かないわけないだろ。お前の親友だし、さあ誘いに行くぞ」

秀一は由依と亜美がいる机に向かい、由依の肩を軽く叩いた。

「よつ」

「秀一君つ!」

「由依達、男子決まつた?」

「まだ、だけど」

「じゃあ俺と真と組まない?」

「えつ……秀一君をつき女子に囲まれたのに決まってなかつたの?  
?」

「真が由依達と組みたいて言つたから」

「えつ……し、秀一君」

「前の仕返し(笑)」

真の耳元で囁いた。

「で、ダメ?」

「良じよ。わつわ秀一君達を誘つか誘わないか話してたの」

「んじや、決まりだな。滝川さんもワロシクな」

「滝川、じやなくてお前で呼んでください、砂我君と相沢君」

「じゃあ畠美つて呼ぶよ。俺達もお前で良いから。それに、敬語じやなくて良じよ向こ年なんだし」

「は」……ワロシクです」

「真もなんか話せよ」

「えつ……なんでいきなり俺に振るの」

「ここからなんか話せよ」

「よ、ヨロシク……」

「あれ？ 真相やつをヒントンシヨン違くない？」

「緊張してんの」

秀一は由依にしか聞こえなことひと言つた。

「なんで？」

「二つか分かるよ」

キーンローン  
カーンローン

「じゃあこれから通常授業頑張れよ」

先生は教室から出でていった。

「ねえ砂我君つて付き合つてる人いるの？」

わざわざ誘つてきた、女子達がまた話しかけてきた。

「えつ……居ないけど」

女子達は、

「ヤツターラー！」などと叫んで凄く喜んでいた。

「じゃあ、私とお付き合お？」

「「ゴメンな。君のことあんま知らんし、俺じゃなくて違う人に言つたら？君、可愛いから君のコト好きな人多いんじゃん」

「可愛いって言われたあ」

女子はめちゃめちゃ興奮した。

「じゃあ名前だけ覚えといつてよお」

「いいけど」

「私の桜乃愛加つてえ言います」

「愛加ね、覚えとく」

「キヤーー！めちゃめちゃ嬉しい」

話が終わるとタイミングよく予鈴が鳴つた。

授業は数学だつた。

数学の先生は清楚な女性だつた。

クラスの半分以上の男子が多分惚れたと思つ。

その次の授業は英語だつた。

英語の先生は2人居て、日本人とフランス人の先生達だつた。

次の授業は家庭科だつた。

最初の授業にしては進むのが早く、いきなり料理をさせられた。

キーンコーン  
カーンコーン

予鈴がなつた。

いつの間にかお昼の時間になつていた。

「秀!」—「…どこので食べる?」

「なるべく人が少ないところ」

「人が少ないところ? どつかあつたけな?」

「じゃあ、裏庭は?」

「人少ないならどこのでも良い」

2人は裏庭に行つた。

「おお意外と人少ないよ」

「なら良い」

「てか、いきなり人が少ないとこが良いって、どうした?」

「寝たかつただけ。今から寝るから昼休み終わつたら起こして」

「お昼は?」

「いやうね

「5時間目、体育なのになあ

秀一は日陰のところで眠つた。  
真は黙々と弁当を食べ始めた。

「あれ、真君何やつてるの?」

ちゅうどお皿を裏庭で食べよつとしていた由依と亜美が通りかかつた。

「弁当食つとる」

「えつと、秀一君は何をして」

「見た通り昼寝中」

由依と亜美は2人して少し微笑んだ。

「2人もここで食べる?俺、1人で食つてるの寂しいし」

由依達は少し考えたが、一緒に食べることにした。

「「じゃあ、失礼します」」

「なんで秀一君寝てるの?」

亜美が聞いた。

「知らね。疲れたんじゃね、秀一の周り女子でうるさかつたし」

「ふーん」

「亜美達はいつも2人だよな」

「「うん」」

2人は笑顔で頷いた。

「仲良いんだな」

「そういう真君達こそ2人でよく居るじやん」

「小学校から仲良いしな」

「仲良くねーよ、バーカ」

「秀一起きて……？」

「あれだけうるさかつたら、誰だつて起きるし」

「「メソ」」

「謝んなくて良いから。つーか、起こせー！」

「なんで?まだ昼休み終わってないじゃん」

「俺が他人に寝顔見られんのヤダから」

「わがままじやん！ つーか、俺は他人じやないの？」

「お前は良いの、小学校からの付き合いだから」

「アーティスト」

「由依と亜美、真なんか言ってた？」

「特に」

「せこに良こや」

秀一は大きな欠伸をした。

「ふあ。次の授業何？」

# 「体育だよつ」

由依が答えた。

寝ねえじせん

「授業中は寝ちゃダメじゃん」

真が言つた。

「真、頭どうかぶつけた？」

「それどういう意味」

怒りを込めながら真が言った。

「さあどういう意味だらうね」

「俺、バカにされてるう？」

半泣き状態の小学生みたいた。

「大丈夫だよ真君。いきなりまともなコト言つたからビックリしただけだよ」

亜美が慰めた。

「亜美だけだあ俺のみかたは」

真は亜美の慰めの言葉にけなす言葉があつたことに気付いてない。

「俺と由依はどうなんの？」

「敵

「私もおー？」

「そつか俺達、敵なんだな」

「秀二君なんで納得してるの」

「敵つてコトは俺達2人は頭が良いこと知ってるよなあ

「し、知つてゐるさ」

真は次言つことが少し予想がついた。

「これから宿題[写]させてあげないからな」

「そ、そんな」

「敵なんだろ」

真は少し考えた。

「敵とか言つて、『メンなさい。2人は敵じゃないですか』  
!だからこれからも宿題[写]させて下さい」

「どうしようかなあ、由依どうする?」

「私!? . . 謝つてるから良いんじゃないかな」

「わーい許してくれた!」

半泣き状態の小学生だったのが嘘のように明るくなつた。

キーンコーン  
カーンコーン

「予鈴なつたし戻るか」

4人は走つて教室に戻つた。

・・・・・ 体育

「めんどう」

秀一は今だに眠そうで大きな欠伸を何回もしていた。

「めんどうとか言つなよ、体育楽しいじゃんか」

「眠い」

「今日バスケだつて、つーか秀一スポーツできたっけ?」

「さあね」

「さあねつて」

真は秀一がスポーツをやる姿を想像してみた。

「カッコ良いな、俺だつてそこそこカッコ良いと思つただけどな」

秀一に聞こえないように呟いた。

「真、先生来たから早く並ぶぞ」

体育の先生は秀一達の担任の近藤先生だった。

「今日は女子と男子合同でバスケな」

「「はーー」」

「チームはこれから名前言うから、Aチーム青木、久保田、相良 . . . . .、Bチーム相沢、加藤 . . . 砂我、高橋 . . . . . Cチーム金澤、柴崎、葉山 . . . . . Dチーム飯塚、小林、遠山 . . . . .だ！女子はAチーム浅野、佐藤、鈴木 . . . 滝川 . . . . . Bチーム安齋、桜乃、福島、前田 . . . . . Cチーム上原、大田、長橋、宮川 . . . . .だ」

「秀一一俺ら一緒だ」

「あつそ」

「あつそって言つな！全力で行くぞ」

「めんどう、本氣出さないとダメか？」

「ダメだろ！目指せ全勝だから」

「仕方無いか」

秀一一はため息をついた。

「最初は男子のA対Bだ」

先生が言つと位置につき始めた。

「ジャンプボール誰にする？」

「誰でも良いんじゃね」

「じゃあ秀一だわ」

「秀一だよなあ」

「Iの内で一番背が高いし」

チームの監督が賛同し、ジャンプボールは秀一がやる」とになつた。

「多分ムリだと思つ」

Aチームのジャンプボールは秀一の頭一つ分高い身長だった。

「できるだけ頑張れ」

チームの監督が秀一の肩を叩いた。

「真、ちょっとといいか?」

「何?」

「相手の後ろのどつかにいて」

「わかった」

「試合開始するぞ」

先生が言った。

秀一は真ん中に行つた。

「うわ、やっぱ高えな」

「試合開始！」

先生はボールを上に投げた。

秀一は跳んだ。

意外と相手は背が高いわりにはジャンプ力がなかつた。  
秀一は相手より高く飛び真が居る場所を探した。  
見つけると同時にボールを叩いた。

「うわ！」

真は本当にボールがくるとは思わなかつた。

「「キヤー秀一君～」」

見学中の女子は秀一のコトを応援している。

真はボールをとり、ゴールに向かつてドリブルをした。

突然、田の前にジャンプボールをしていた長身の男子が現れた。

「真！」

「秀一！」

真は秀一にパスをした。

秀一はボールを取るとその場からゴールに向かつて投げた。

ポスツ

ボールは「ゴールに吸い込まれるように入った。

「3ポイント！…」

秀一は一発目から3ポイントをとった。

「秀一～すげえ」

真がハイタッチをしてきた。

「秀一、バスケできたんだな！つーか、かっこえ」

見学していた女子は騒ぎあくっていた。

「文武両道つてやつか」

「はいはい、次は真が点入れれば」

「簡単に言つなあ」

「試合再開するぞ…」

・・・・・・・・

「終～～」

結局、42対12でBチームの勝ちだった。

秀一が半分以上、点をとった。残りは真がとった。

この試合で多分このクラスの女子は秀一と真を惚れたと思つ。

全試合が終わった。

Bチームは秀一一と真の活躍で全勝した。

女子の方は由依と亜美は同じチームで1勝2敗だった。

体育の授業は終わった。

今日は授業が5時間田までだった。

HRが終わるとぎりぎりと皆が帰つていった。

「秀一一、帰るぞー」

「ああ

2人は教室を出た。

「あの、秀一一君達！」

後ろから由依が声をかけてきた。

「由依じゃん、どうかしたの？」

「一緒に帰らないかなあと思つて

「良いけど、亜美は？」

「先に玄関と二行つてゐつて」

「へえ～」

真は嬉しそうだった。

「こきなり帰らないつて言つておたナビアつした？」

「畠美が・・・」

「畠美がどうかした？」

真は嬉しそうで上の空だったから秀一と由依の声は聞こえていなかつた。

「告白するつて言つて出した」

「えつーー？」

秀一から見たら畠美は自分から告白するなどと言わなそつた。

「推測すると真に？」

「うん・・・」

「意外だな」

「なんか一目惚れだつたらしい・・・」

「えつと、手伝つても良いけど」

「な、なんで私が言おうとしたこと分かったの？」

「なんとなく」

「じゃあ手伝ってくれるの？」

「ああ良いよ」

「ありがと」

由依は本当に嬉しそうに笑った。

「えっと、2人にしてあげたいんだけど、どうしたら良いかな？」

「校門出るときに、用事があるんだつたんだーとか言って2人にしてあげるとか」

「あつそれで良いね」

3人は玄関についた。

「亞美ー」

「由依ーどうだつた？」

「秀ー君、協力してくれるつて」

「良かつたー」

秀一と真は2人から少し離れたところから見ていた。

「秀一あれ何話してると思つ?」

「何だろな。つーか真にやけてる」

「嘘マジー?」

「気持ち悪い」

「ヒドシ」

4人は玄関を出て校門の近くまできた。

「あつ真悪い!俺買い物して帰んなきやいけないんだつた」

「えつ秀一ー?」

「私もお母さんに早く帰つて来なさいって言われてたんだ

秀一と由依は走つて校門を出た。

校門から見えないぐらいのところまで走つた。

「ここまで来れば大丈夫何じゃね

「う、うん・・・」

「由依、大丈夫か

「だ、大丈夫。秀一君、足早いつ」

由依は息切れしていた。

「「」、「メン。 今から時間あるなら休めそなとこ行く？」

「うん」

2人は秀一がよく行く喫茶店に行つた。

「ここ」の喫茶店良いだろ？」

「うん。 落ち着くね」

「だろ、中2ん時見つけたんだ」

「へえ~」

2人はさつき頼んだケーキと紅茶を食べながら話した。

次の日

秀一は家を出たら調度、由依と会つたので一緒に登校した。

「あの2人どうなつたんだろ？」

「付き合つたんじゃん」

「なんで、そんなはつきり言い切れるの」

「だつて真も亜美のこと好きだから。 前言つたじゃん俺、合宿の班

決める時、真が緊張してただろ由依がなんで?って聞いたからいつか分かるよって言つただろ」

「あれって、好きだから緊張してたの!?」

由依はすぐ驚いた。

「由依って鈍感なんだな」

「へつ?」

「あつ! あれ見てみろよ」

「何?」

学校の校門を真と亜美が一緒に通つていた。

「あつ! あの2人付き合つてるのかな」

秀一と由依は確かめるために真達を走つて追いかけた。

「よつ、真!」

「おはよ、亜美!」

「うわつ! 秀一か

「わつ、由依!」

「2人ともずいぶん仲が良いな~」

「昨日から付き合に始めた」

「知ってるんだけど真君はなんて返事したのかな～」

「教えるわけないじゃん。それに・・・」

真は亜美の顔を見た。

すると、2人の顔がすぐに赤くなつた。「からかうなつ

「まあ良かつたつてコトで合宿楽しみだな」

「あつー忘れてたつ」

「真、合宿のコト忘れてたの」

亜美が頬を膨らました。

「『メンツーでも、楽しみだな亜美』

「うんっ楽しみだね」

真と亜美は2人の世界に入つていつた。

「完全に2人の世界に入っちゃつたね」

「そうだな～。俺も彼女欲しいかも・・・」

「えつー！」

「由依なんでそんなにビックリしてんの」

「いっ いきなり彼女欲しいとか言つから驚いたのつー。」

「驚くことないと思うんだけど、俺だつて男だしつ」

秀一は由依が驚くとは思わなくて焦つた。

「はつ早く教室行こ」つばつ

2人は小走りで教室に向かつた。

「あつ！秀一君おはよお」

桜乃が挨拶をしてきた。

「おつ」

「ねえ 今日の放課後遊べるう？」

「えつ ・・」

秀一は今日は予定あつたかなと考えた。

秀一が考えている間に桜乃が秀一の隣に居た由依に気付き睨み付けた。

由依はそつと秀一から離れ教室に入つた。

「女子の友達とお一緒にいカラオケ行くコトになつててえ、もし良かつたらあ秀一君もお行かないかなつて思つてえ」

「ゴメンな、確か今日予定あつたから」

「そつかあ……じゃあ今度遊べる日教えてねえ」

「秀一はいつの間にか隣に居た由依が居なかつたから教室を見渡した。

「あつ！居た」

由依は自分の席にちょこんと静かに座つていた。

「由依なんで一人で席行つてんのさあ」

「邪魔かなつて思つて」

「邪魔じやないし、つーか助けてほしかつた」

「なんで？」

「俺、桜乃みみたいなタイプ嫌いだから」

「そつなんだ」

少し由依は頬を膨らました。  
でも秀一は気付かなかつた。

「で、桜乃さんと遊ぶことにしたの？」

「予定あるつて断つた」

「ふーん、予定あるんだ」

「嘘だよ。今日誰とも遊ばないし真も亜美と付き合つたから遊べないだろうじ

「そりなんだ . . .」

由依はホッとした。

「ていうことで今日、俺暇なんだ」

「へえ」

「へえって興味ないのかよ」

由依は無関心のよう返事をした。それに對して秀一はなぜかガッカリした。

ガラツ

先生が教室に入ってきた。

「みんな席つけ」

「「はーい」」

みんながぞろぞろと席に着いていく。

「今日は4時間授業だ」

「「やつたあー.」」

みんなは、はじや始めた。女子の間では「今日遊ぼうよ」などと放課後のこと話をしている。

「4時間授業つていっても1年は合宿の「トやるから」

「ハーハー」

「さあやく合宿について話すぞ」

先生はまだ4時間授業と聞いてテンションが高いみんなに話始めた。

「合宿は2泊3日だ。1日目の夜は肝だめしをやる。2日目の夜はキャンプファイヤーをやるぞ」

「わーい！」

「ていうことで今日は肝だめしのペアとキャンプファイヤーで何するか決めるぞ」

みんなは席から立ち上がり仲良しの友達同士で集まつた。

「言つとくけど、男女ペアだからな」

秀一達のクラスは男子と女子が同じ人数だから男女ペアになつたらしい。

すると、クラスの半分以上の女子が秀一のところに集まつてきた。

「私と肝だめしのペアになつてくれない？」

女子の中には当然のように桜乃の姿もあつた。

「私とおペアになつてくれない？」

秀一の隣には調度、真が座っていた。

「真助けろっ」

秀一は女子に聞こえないように真に助けを求めた。

「俺が！？」

「ああ、この場から抜け出せせてくれ」

「わかった」

真は立ち上がった。

「」にはもう先約あるから「ゴメンな」

「またあ、先約う」

「桜乃、ゴメンな」

秀一と真はその場から離れて由依と亜美が居るところに向かった。  
「なんとなく」

「なんとなくってビックリするでしょう」

亜美は真と付き合い始めたけど人前で抱きついたりされるのは苦手で顔を赤くしていた。

「わかったよ。肝だめし一緒にいこうね」

「うん！」

顔はまだ赤かつたけど亜美は満面の笑顔だった。

「やつぱ可愛い」

真はまた抱きついた。

「恥ずかしいよお」

「また、2人の世界に入っちゃったね」

「そうだな」

「秀一と由依は2人から少し離れたところで見ていた。

「あのう . . . 」

「何？」

「あの、肝だめし一緒に行つてくれる？」

由依が顔を少しかしげながら言つてきた。

「いいよ、俺も相手探してたところだ」

「じゃあ決まりだね」

由依は亜美みたいな満面の笑顔で見てきた。

「秀一は無意識に「可愛い」と呟いてしまった。

「そろそろ肝だめしのペア決ましたか？」

「決まりましたあ」

「よし。じゃあ次はキャンプファイヤーの周りで何やるか決めるぞ」

「はあー」

「桜乃が、どんな案だ？」

「私はあ、合宿の時つてえ私服じゃないですか。だからあ好きな人同士で普段使つてる物とかを交換するとかどうですか？」

「まあ学生にしたら楽しそうだが、この案に賛成の人つ

「「はーいー」」

ほとんどの女子が手をあげた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8392j/>

---

セツナイ恋の詩

2011年10月9日21時51分発行